はだか隨筆

左藤弘人著

はだか随筆

佐藤弘人著

中央経済社

著者紹介

本名・佐藤　弘，大分県中津市生
大正11年東京帝国大学卒業
一橋大学教授・理学博士
東大・阜大・明大各講師
著書：経済地理・政治地理その他多数

昭和二十九年十月十日初版
昭和二十九年十二月二十六日二版

はだか随筆

定価一五〇円

著者　佐藤弘人
発行者　大谷憲三
印刷者　中内佐光
発行所　株式会社　中央経済社
本社　東京都千代田区丸の内丸ビル五階五三〇区
電話・和田倉(20)三七八三—四・四一二八
振替口座・東京一〇六三二一九
営業所　東京都千代田区神田神保町一の五三
電話・東京(29)一八七三・四四三七

乱丁・落丁本はお取替えいたします

序

佐藤弘博士が隨筆集を上木されるので、僕に序を求められた。人間、世相、社會、學藝萬般に亙つて、博士が呑氣な態度で、樂しみながら、心の趣くがままに誌した隨感隨想の集積である。讀みゆくうちに、我々は屢々博士のいはゆる聖談——つまり性談に通じ、やがてY談に滑りこむ珍談漫談——に接して、微笑したり哄笑したり爆笑したりするのだ。

由來、快く晴やかな笑を伴はぬY談は頗る聞きぐるしく、いやらしいものだが、博士のY號聖談は、爽やかな微笑から男性的な爆笑に至る正道を踏んでゐるやうに思はれる。それ故、讀んだ後口ににがいものを殘さぬところに、その仁の氣取らぬ惡童ぶりが快く受け入れられるのである。

博士は、如何に足らぬがちの生活を送らうとも、大學教授の生涯に滿足して居られる。

その點は僕も無條件に贊成なのだ。僕も亦、來世に生れかはつたら、此度は小學校から勉强して、また大學教授　生涯を繰返したいと思つてゐる。

辰野隆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

序

理學博士の隨筆集とあるから、さだめし私どもには難かしいことばかり、書いてあるのではないかとオソレをなした。然し、著者及び發行者から、特に序文をと依頼される以上は、內容も私が序文を書いて、そうオカシクないものであろうと推察された。

で、とにかく一應どんなものか、讀まして頂きたいと云つたら、校正刷りを屆けて下さつた。相變らず私の日常は、愚忙を極めているので、ゆつくり熟讀玩味している暇がなく、まつたくの走り讀みで申しわけないが、まつたく讀みもしないで、序文だの推薦文だのを書くセンセイ方よりも、いささか良心的のつもりである。

卷頭の「大學教授の生活白書」から卷尾の「人類の遊戲」に到るまで、全篇これ正直な〃白書〃であり、嚴肅な〃遊戲〃である。讀んで面白いことは、太鼓判を押すことができる。

エロに關する考察が、なかなかに多い。流石に理學博士の說である、と三嘆させられるところもあり、またコノ道バカリは、個人差が非常にあるので、どうも無條件には贊同致しかねるという說もある。そこがまた面白いところでもある。

「二つの體驗」の中の〃一萬圓事件〃を讀みながら、佐藤博士がもしも、この一萬圓を猫ババきめていたら、この隨筆は書けなかつたに違いない、と思うと私は至極ユーモアを感じた。猫ババを書くとすると、どうしても小說かザンゲ錄でないと拙い。

私自身も、屢々、隨筆めいた文を書くのであるが、自分の日常生活が、全部隨筆に書けるようだつたら、まことに結構だと思うのである。どうも、時々、隨筆に書けないようなことを仕出かすのでいけない。

徳川夢聲

序

佐藤弘教授の隨筆は、その知識の廣いこと、態度の率直であること、社會人、學者としての判斷の確かなことで、一般文筆業者の隨筆とちがつた趣を持つてゐる。生活の弱さを文章のアヤによつて飾る、といふ文士の作品の弱點をこの書物は持つてゐない。觀察、學問、生活といふものが、ユーモアといふ彈力のある人間性受容の態度の中によく消化されて、生きることの豐かさと樂しさを味ははせる最上の讀みものになつてゐる。

伊藤　整

自序

○　私の隨筆は、小說と「實說」との中間を行くもので、面白く讀んで頂くために、どうかと思われることや、心にもないことや、誇張されたことが、多々書いてありますから、隨筆を愛好される方はいいが、そうでない方は、茶の間か、電車の中か、ベッドの中で、本書を讀んで頂きたい。そうしないと、

「何んだ！　くだらんことを……」

と、お叱りをうけるところが、方々にありますから。圖書館や研究室では、あまり繙かないで下さい。

たしかに本書は、辰野博士の云うように、上品なY談で爆笑がつづき、夢聲大人の云うように、「正直な白書」で、「嚴肅な遊戯」であり、また伊藤先生の云うように、「ユーモアのある彈力性」にとんだものであります。

○そういつた關係で、本書の表題は「先生の失言」にしようかと思いましたが、一般の受けは「はだか隨筆」の方がよかろう、と云うことになつて、そのように決めました。

○文章の表現は色々な形式を取つてみましたが、戯曲風や、書翰風のないのが殘念です。また內容も種々雜多のものを取り入れましたが、これも充分ではありません。その上、思想の貧弱なため、表現のダブツたところが二、三カ所あります。またくだけ過ぎた書き方は、每號書いた「產業經理」という雜誌（簿記、會計）が、あまりかたかつたので、その反動だつたのかも知れません。

○話が少し前後しましたが、本書は、主として昭和二十五年から「產業經理」に書いたものを集めたもので、その他、文藝春秋、經濟往來、經濟新潮などに書いたものも、再錄してあります。

○參考書とては別にありませんが、ゲーテ詩集（星野愼一譯）、パスカルのパンセ（津田穣譯）、續アルスアマトリア（高橋鐵著）、「笑の泉」、「オール讀物」などから二、三の文句を拜借いたしましたから、御斷りしておきます。

○ 最後に斯界の權威である辰野隆、德川夢聲、伊藤整の諸先生方から推薦文を頂き、また清水崑先生から裝釘して頂き、有難く思つています。

昭和二十九年秋　　東京にて

著者識るす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

はだか随筆

大学教授の生活白書……1
自己宣伝……7
唯物論と女性……11
反作用と女……11
弁証法と女……14
対立物の統一……18
母性愛と女……18
事業愛と男……22
随想二題……25
漫画と私……25
代官と生命力……29
女優と学者……33
唯物論と精子……40
五千円の旅の悲喜劇……46

県立埼玉図書館川越分館

小樽遊記……50
チャタレイ裁判……57
ほんとうかしら……63
人間の適応性……69
女のお尻……69
好き嫌い……71
智慧の実……75
わからない話……77
小児麻痺……77
論文審査……81
性語と噂さ……85
聖　語……85
噂　さ……88
風景ア・ラ・カルト……92
駅頭風景……92
スト風景……93

ハバネラ風景……95
ビル街風景……96
合理的な不精者……99
馬鹿ね……あんたは……99
いやね……あんたは……100
代弁の始末……103
神との座談会……104
銭湯風景……111
二つの体験……118
私の随筆……118
一万円事件……121
小便哲学……125
へのこ神社……131
田県神社参拝……131
姓名の順位……137
結婚の式辞……139

愚問・愚答……147
二つの祝賀会……154
吹田先生の古稀の祝……154
太田先生の学位の祝……158
小樽から登別へ……161
たわごと……167
自転車経済……167
三コマの本能……171
類推学のコント集……174
戦後の流行……182
男は浮気もの……190
粘膜論……190
第二の性……193
落穂拾……198
学校で拾った話……198
委員会で拾った話……201

待合で拾った話……202
生の苦悶……206
前書き……206
肺病と戦う……208
放屁論……213
試験の珍問・珍景……220
雑誌起縁噺……227
エロ修練……227
続放屁論……229
麻雀哲学……231
あれこれ四景……237
ドイツのヒステリー……237
議長のノーズロ……239
地球の章駄天……240
死との奇遇……242
人類の遊戯……244

縣立埼玉圖書館川越分館

大学教授の生活白書

慶応で「先生」と云えば、福沢諭吉のことで、その他の職員は塾長を含めて、総て「君」である（大宅壮一、週刊朝日）。東大や一橋大では、先生を影では「さん」付けで呼ぶ。事実、先生というものは、故人か高齢者にだけ使うのが応わしい。それと、「チェンチェ……おしっこ」の幼稚園の先生に応わしい。その他は「君」か、「さん」か、「氏」か、位でよかろう。

○

最近は新制大学のインフレで、そうでなくてさえ、按摩から髪結、産婆から医者、床屋の親爺から代議士、種々雑多な御師匠さんに至る迄、これ皆先生であるから、世はあげて先生の大洪水で、全くいやになってしまう。それに先生と云う表現の中には、「さん」や「氏」とちがって、色々な意味が含まれている。時には皮肉的に、時には侮

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong